
白紙の地図と高校生のP G C

白凧 黝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白紙の地図と高校生のPGC

【Nコード】

N7675Y

【作者名】

白凧 黝

【あらすじ】

2055年。

世界の地図は白紙に帰った。

終わりの見えない不況が、第3次世界大戦を引き起こしたのである。連合も同盟も無い己の利権のみを求めた2050年から約5年にも及んだ大戦は、世界各国と国境を消し去った。

終戦から約20年後の2075年。

日本は、先の大戦で権力を握ったPMC（民間軍事会社）に因って、

掌握されつつあった。

だが、P M Cが権力を握る前。崩壊していたかつての日本の治安を守っていたのは、P M Cと同時期に設立された、P G C（民間警備会社）だった。

これは、かつての日本のとある街のP G Cの少年少女達の物語。

プロローグ1（前書き）

初めまして。

白屈 黝と申します。

このような形で、小説を掲載するのは、初めてで、駄文かも知れませんが、生暖かい（？）目で見守って頂けたら幸いです。

尚、私は学生ですので、考査などで更新が遅れる場合がございますが、ご了承下さい。 m（――）m

プロローグ1

「ーハア、ハアー」

夜の闇に沈む閑静な住宅街。

その街中を息が切らしながらも少女は走っていた。

少女を動かしている原動力。

それは『恐怖』と言う名の感情と死にたくない、と言う思いだった。その二つが今にも立ち止まってしまいそうな少女を必死に支えている。

後ろを振り返ると追手はーー刃物を持った男は、まだ少女を追いつけ続けていた。

「なん、で…」

何かをした訳でも無い。

何時も通りの日常だった。それなのに、何故。

自分が、『通り魔』の餌食として選ばれてしまったのか。

走って、走って、走って。辿り着いたのは、行き止まりだった。

防犯意識の高さからか、行く手を阻む壁は高く、少女に取って乗り越える事など不可能だった。辿り着いたのは、行き止まりだった。

行く手を阻む壁は防犯意識が強いのか、異常に高く、乗り越える事は、不可能に近い。

こんな結末を、運命を、少女は呪った。

壁にもたれて座り込んでしまった少女に男が近寄って行く。

死に間際の走馬灯。

その言葉が本当で有ったと、少女は身を持って体験していた。僅か十数年の人生。

その一コマ一コマが、ゆっくりと流れていく。

男が刃物を持ち直したのが見えた。

少女は目を固く閉じ、来るべき『死』に備えた。

――数瞬の後。

辺りに紅の飛沫が飛び散った。

プロローグ1（後書き）

コメントなど頂けたら嬉しいです。

白紙となった地図（前書き）

プロローグ1の塀の描写が二回重なっていました。
申し訳ありません。

m () m

白紙となった地図

初春にしては冷たく感じる、屋上の乾いた風。

その風に髪を揺らされ、風見一希はうつすら目を開けた。

一希は立ち上がり、体を反らす。パキパキと鳴る体は、長い間一希が其処に座り込んで居た事を示していた。

日の光を吸収しているかの様な漆黒の髪。

制服に身を包んだ体は、高校生にしては、背丈が高めだった。

一希はゆつくりと柵の側に歩み寄る。

この高校――私立月下高校の屋上からは、街が一望出来た。

否――街、ではなく世界、か。

半径10キロの円を描く壁。その中の街が、一希に取っての世界だった。

今から約25年前。

まだ、一希も生まれていない頃――

世界を巻き込んだ最後の戦争が有った。

第3次世界大戦。今ではそう呼ばれている。

事の発端は、たった一回の発砲だったらしい。

テロ行為が激化していた中東、其処のテロリストが治安部隊に対して行った威嚇射撃が命中。

それが発端となったテロリスト対治安部隊の戦いは泥沼化。

次第に戦火は中東各国に飛び火。

いつの間にか、テロリスト対治安部隊の戦いは国家対国家と言う状態となっていた。

普通ならば、この辺りで国連か何処かの機関が仲介し、終戦へと戦局は向かっていっただろう。

だが、そうなる事は無かった。

中東での戦争に乗り、中国、ロシアがあらゆる利権や資源を求め、アメリカ、東南アジアに侵攻した為だった。

2008年頃に起こった金融危機。それは、一時的に収まったものの、完全に収まる事は無かった。

更に、中東で戦争が始まった事で、只でさえ少なくなっていた石油などの資源が枯渇。

経済的な利権・資源を求め、戦争が勃発するのも、無理は無い状態だったらしい。

そして、それに続くかの様に、アジアは勿論、南米、北米、アフリカ、ヨーロッパ…あらゆる国が、互いに宣戦布告し、第3次世界大戦が始まった。

日本も例外では無かった。各国の軍隊の前に自衛隊は壊滅。民間人軍人問わず、死者は計り知れない。

大戦は始まって約五年で終結したが、別に各国が自らの愚行に気が付いた訳では決して無い。軍資金・兵力の消滅、他国の侵略に対する全面降伏、そして、戦略型核兵器の使用など様々な要因で、戦争を行う国家自体が消滅してしまったからだった。

家族や住む場所を失い、生き残った人々は、二度とこのような事を繰り返さないように、と2055年に互いに永世中立を誓い、自衛力以外の一切の武力を放棄した。そして、世界各地に11核兵器の影響が比較的少なかった場所に11五つの都市を作りそれぞれに第1〜第5と都市に番号を割り振った。

国境が消え、世界地図が白紙になった瞬間だった。

だが、国境が消えたとは言っても、集団には、統治者が必要だった。人に人は支配出来ない、とは良く言った物だが、統治者が必要というのは、なんという矛盾だっただろうか。かつて日本であった場所

に位置する第4都市の支配権を手に入れたのは、自衛隊が壊滅した後、日本を辛うじて壊滅から守りきったPMCだった。PMCに因って統治されている日本——第4都市の治安は、表向きには、PMCが統治しているからこそ、治安が保たれていると一般人には思われている。

そう、表向きには。

都市を眺めて居ると、ズボンのポケットに入っていた携帯が震え出した。一希は携帯を取り出すと、ディスプレイを一瞥、受話器のボタンを押して、耳に当てた。

「——何だよ、舞無（むな。）さん。」

「久しぶり、一希君。元気？」

その声には、僅かな笑いが含まれていた。

「舞無さんの声聞くまでは元気だったよ。」

聞くまでは、を強調し、一希は答えた。

「……まあ、そんな事はどうでも良いわ。それで。」舞無の声色が変わった。

例えるならば、冷たく冷えきった、鋭利な刃物。

「『依頼』か？」

それに合わせ、一希も声のトーンを落とす。

「そう。急で悪いと思うけど、今から事務所に来てくれない？」

「分かった。今から行く。」

一希は通話を切った。

そして、鞆を手にする——

柵を乗り越え、屋上から飛び降りた。

白紙となった地図（後書き）

テスト期間中に、小説書いて投稿する私は異常…？
感想など有りましたら、宜しく願います。

タイトル修正のお知らせ

「白紙の地図と高校生のPGC」

へと、近日中に変更します。

ご迷惑をお掛けし、申し訳ありません。

事務所へ依頼（前書き）

遅れてすみません。

今回はちょっと長いのと、審査期間なので遅れました。

事務所へ依頼へ

落ちていく。

制服の裾が風で暴れ、耳を風切り音が支配した。

屋上から地面までの距離は、十数メートル。

その高さから飛び降りたのだとすれば、只では済まないだろう。

だが、一希の顔には焦りや恐怖などは、浮かんで居ない。

地面まで数メートルを切った所で、一希は足を曲げ、衝撃に備えた。

――ダンッ

数秒後には、一希は土埃に巻かれながらも、平然と地面に立って居た。

第四都市は大まかに六つのブロックに区分されている。

主に行政機関が集まる中央のブロック。

商店が集まる東のブロック。

農場が広がる西のブロック。

住宅街の南のブロック。工業地帯の北のブロック。

そして――今、一希が歩いている、繁華街の北東のブロック。

別名『捨てられた街』。

このブロックだけには、第四都市の統治者であるPMCも関わろうとしない。だが、第四都市の嫌われ者達や、何らかの事情で、身を隠して居る者達が集まるこのブロックは、他のブロックに比べても、明らかに活気に満ちていた。

一希は五月蠅い雰囲気は好きではない。

だが葬式のような、重い雰囲気も嫌いだった。

静か過ぎず、五月蠅すぎず――それが、一希の最も好きな雰囲気

気だった。

北東のブロックに入り、歩くこと数分。

一希は、三階建ての雑居ビルの前に居た。ビルの壁面はひび割れ、仮に地震が来たら、数秒で倒壊してしまいそうだった。

正直、この中に入る事に一希はかなりの躊躇いが何時も有ったが、今では気にしない様になっていた。

だから、入り口の階段に足を掛けた時、頭上から僅かにコンクリートの欠片が混じった埃が降ってきて、一希は気にしなかった。否、気にしなくなかった。

二階に上がると、壁の雰囲気全く合っていない扉が有った。

扉には、筆記体で『Tukisita Private Guard Company』と綴られていた。

今にも倒壊しそうな、雑居ビルの二階。

此所が、一希が所属するPGCの事務所だった。

扉を開けると、一人の少女が、デスクの上で書類を広げていた。

「案外早かったわね、一希君。」

書類から目を離し、一希に目を向ける月下高校の制服を着た少女。彼女こそが、一希の雇い主であり、月下民間警備会社の社長、月下舞無。

因みに、舞無の祖父は『月下』と言う名字の通り、一希達が通う私立月下高校の理事長だ。

舞無自身も生徒会長の地位に就いて居る。

「舞無さんが早く来いって言うから急いで俺は着たんだが。」

肩をすくめ、一希は事務所の隅に置いてある自分のロッカーを開く。

その中には、防弾チョッキ、拳銃など、この仕事には欠かせない物が詰め込まれていた。ロッカーは全部で三つ有ったが、使われているのは、二つだけだった。

「で、依頼って何だよ。また、殺し合いか？」 実際、これの
つ前の依頼が、ヤクザの掃討だった。

「違うわよ。何時も何時も、そんな血生臭い依頼ばかり受けた
りしないわ。」 それを聞いて一希は、自分が銃を使う必要が無かつ
た依頼は何れ程有ったかを思い出そうとしたが、止めた。

そんな事、指で数えられる程しか無かったからだ。 如何わしい
視線を舞無に向かって照射していると、突如、何の合図も無しに扉
が開いた。

刹那――

一希は、拳銃をホルスターから抜くと、銃口を扉に向ける。

この事務所に来る人間は多くない。 もし仮に依頼人であったな
ら、扉の脇に有るチャイムを鳴らすか、ノックをしている筈だ。

一希が、チャイムを鳴らしたり、ノックをしなかったのは、予め
舞無に呼び出されて居たので、舞無が来訪を知っていたからだ。

となると、敵か味方が。 当然だが、一希は恨みを買わずに今
まで生きてきた訳ではない。

P G Cと言う職業柄、何時鉛玉が飛んできてもおかしくないのだ。
だが、今回扉の向こうに現れた答えは、後者だった。

「……随分、物騒な歓迎ですね……」

その声と姿を認知した瞬間、一希は脱力し、銃口を下げた。

「舞無さん……どうして、雪華さんも来ると言ってくれなかったん
ですか……？」 扉の向こうで困惑した表情で立って居たのは、一希
と同じく月下民間警備会社に雇われて居る、彩萌雪華あやめせつかだった。 月
下高校の制服を着て、長い髪を後ろで束ねた彼女は狙撃銃を背負っ
ていた。

「いや、今から言おうと思ってただけ……来るのが予想外に早
かったわ……」 呆然とする舞無を尻目に、狙撃銃を下ろした雪華は、
小型のアタッシュケースを床に置いた。

「これが、今回の報酬です。」

ケースを開けると、札束が、二つ――200万円程入って居た。

「…ああ、有り難う、ご苦労様、雪華。」

混乱から回復した舞無がそう言つと、雪華は窓枠に腰を下ろした。一希も、近くの椅子に腰を下ろす。「さて、今回の依頼は、護衛よ。」

二人が座るのを待つて、舞無が切り出した。

「護衛、ですか？」

雪華が意外だと言う様に聞き返す。

「ええ。最近、女子高生が通り魔に殺されていると言うニュースを聞かない？」

「ああ…」

そう言えばそんな事を聞いた事が有る様な気がするな、と一希は思った。

「…でも、何で一希さんと私の二人が呼ばれるんですか？護衛なら、狙撃銃しか扱えない私より、拳銃が扱える一希さんの方が良いんじゃないですか？」

「それなのよ。」

舞無は溜め息を吐き、続けた。

「これが民間人からの依頼だったら、ね。」

「その言い方は、まさか…」

一希には、嫌な予感しかしなかった。

「ええ、今回の依頼人は、PMCよ。」

第四都市の治安は、PMCが守って居る。

一般人の常識は、そうだ。

それは確かに嘘では無い。

実際に、殺人事件等の捜査を行うのは、PMCだ。だが、稀に、PMCが手に負えない犯罪が発生する事も有る。

そんな時、PMCは、多額のお金で、密かにPGCに依頼をする。否、依頼をする、と言うよりは、丸投げする、と言った方が正し

いか。

依頼の内容は様々だ。

今回の様に、護衛をする事で、次の被害を食い止める為の物や、明らかな殺戮行為等のPMCが出来ない『黒い』仕事等々…

少なくとも、全て命を賭ける必要が有る仕事ばかりだった。

そして、仮にPGCの人間が依頼の最中、犯罪者等を逮捕したとしても、一般に知られる事は無く、全てがPMCの手柄としてマスコミには、伝達される。

PMCに因る第四都市の統治は万全だと、知らしめる為に。

その代わりと言うのも何だが、PGCの社員には、銃器の所持、使用等の、多くの権限が与えられていた。

人の殺害、と言う一点を除いては。

「つまり、PMCが依頼してきたから絶対に失敗する事は出来ない。だから、念には念を入れて、俺と、雪華さんの二人にこの依頼に取り組んで貰う…と言う事ですか？」

「流石ね、一希君。物分かりが良くて助かるわ。……なら、二人共、明日から此れで頼むわ。」

妙な早口と共に差し出されたのは――制服？

いや、只の制服だったらまだ良い。

それは、男子の物と形状が多少異なっていて、下は……スカート？

「あの…もしかしてこの制服って…？」

雪華が恐る恐る問う。

それに対して舞無は、わざとらしく視線を反らした。

だが、一希は逃がさず舞無を追撃する。

「女子高の制服ですよね。」

それは、月下高校の姉妹高校、逆瀬女子高の制服だった。

「……安心しなさい。……只だったから。」

遠い目をしながら舞無は言ったが、勿論そう言う問題では無い。

「舞無さん。…俺、男なんですが。」

「そのくらい、見れば分かるわよ。」

即答だったものの、声は僅かに小さかった。

「まさかとは思いますが……護衛対象が、逆瀬女子高の生徒で、俺達に女子高に潜入しろ、とか言うんじゃないですよ。」

「……」

舞無の沈黙が、肯定を意味して居た。

一希は、雪華が来るまで舞無が依頼内容を話そうとしなかった訳が分かった気がした。

…雪華にフォローを頼む為だ。

その証拠に、さつきから舞無は視線で雪華に救援信号を送っている。

その救援信号を受け取った雪華は、困惑半分、哀れみ半分、という様な表情で口を開いた。

「まあまあ、一希さん。一度着てみたらどうですか？一希さん自身の素材も良いですから、案外似合うかも知れませんか？」

「いや、仮に似合ったとしても嬉しく無いですよ！！」

全くフォローになって居なかった。

と言うか、何処の世界に、女装が似合って喜ぶ男子高校生が居るんだ。いや、仮に居たとしても、もうそいつは確実に末期だろう。

精神的な意味で。

「でも、仕方ないじゃない。偶然この学生が当たっちゃったんだし。」

「舞無さんが開き直ってどうするんですか！？」

数分後。

一希が折れた――

舞無が実際に、PMCから来た依頼書を一希に見せ、雪華が仕事だからしょうがない、と必死にフォローした結果だった。

こうして、一希と雪華は、逆瀬女子高に潜入、護衛の任務に当たる

事
と
な
っ
た
。

事務所へ依頼へ（後書き）

注意……作者に女装癖は無いです。

一希が持つ拳銃と雪華の狙撃銃の名前募集します。コメントなどでお願ひします。

まあ、コメントなかったら作者が考えますが…

ご感想、ご意見、お待ちしております。

二人の『かずき』（前書き）

考查が終わりました。

これから、四日に一回位のペースで更新したいと、考えております。

二人の『かずき』

「このド変態。」

南ブロックの住宅街、其処に位置する一希の自宅。

事務所から帰って来た一希に対しての家人の第一声は、お帰り、など優しい物では無かった。

まあ元々、この家人にそんな台詞は期待していなかったのだが。

「帰って来るなり、いきなり酷いな、一姫……」

風見一姫。

それが一希の唯一の家族であり、たった一人の妹の名前。

ところが、兄妹にしては、容姿はかなり異なってる居た。

只一点を除いては。

「何で女子高の制服を持って帰って来た変態に普通に接してやる必要が有るんですか。」

「兄を変態呼ばわりするな！！それに、これは俺が望んで持って帰って来た訳じゃねえ！！」

一姫に変態呼ばわりされる原因となった、逆瀬女子高の制服が入った袋を振り上げ、一希は叫んだ。

すると一姫は哀れみを込めた目で言った。

「ああ、PGCを首になつて、今度はオカマバーにでも就職するんですか。良かったじゃ無いですか、直ぐに再就職出来て。」

「……………」

一生、この妹には舌戦で勝てないのだろうな、と一希は確信した。

「ところで兄さん。」

「何だ？」

「何時まで靴を履いて玄関に立つてる積もりですか？」

一希は未だ、玄関から上がれて居なかった。

夕食を食べた一希達は、テレビでニュースを見ていた。

今日もニュースは事故だの殺人だの、どうでも良い事ばかりを喋って居る。一希も一姫も、どんなニュースにも眉一つ動かさない。

一希は、ふーん、位にしか思わないし、一姫に至っては何とも思っ
て居ないだろう。

人の一人や二人、傷付く事など、当たり前だと知っているからだ。

この世に於いて、『幸せ』と『不幸』の総量は常に一定だと二人は
思っている。誰かが幸せになれば、誰かが必ず不幸となる。

故に、誰もが幸せな世界など存在しない。

何故なら、この世界では、身長や体重と言ったステータスですら、
不幸となつて自らに降り掛かつて来るのだから。

一希はP G Cの仕事の中で、一姫は学校で、それぞれそれを知った。
否、自らの身を持って体験した。

だから、ニュースを一希は同情もせず流すし、一姫は只それを『
情報』として処理していた。

ニュースが終わると、二人はテレビを消した。

バラエティー番組にも、ドラマにも二人は全く興味が無い。

だから、二人は芸能人の名前など一人も知らない。

だが、その所為で、二人の生活に影響が出た事など無かった。なぜ
なら、一希の数少ない友人も芸能人関連の話は苦手な有ったし、一
姫には、一希やその知り合い以外に会話する相手すら居なかったか
らだ。

テレビを消すと、一姫は戸棚から目薬を取り出し、目に差した。

「やっぱり痛むか？」

一希は目を閉じて居る一姫に声を掛けた。

「少し痒い程度です。問題有りません。」

そう言ってから開かれた一姫の両目は――紅に染まって居た…

一姫だけでは無い。

一希の右目も、紅に染まって居る。

勿論充血などでは無い。

もし充血なら、虹彩まで紅に染まる筈が無い。

医師に診てもらった事も有るが、詳しい事は分からなかった。

では、何時からこうなってしまったのか。それも定かではない。何故なら、二人には、五年から前の記憶が全く存在しないからだ。

一希に取っての最初の記憶は、この家の居間で、目覚めた事だった。

分かって居たのは、自分の名前と、両親は居ない事、そして、一緒に倒れて居た少女が妹の風見一姫だと言う事だけだった。

自分の右目と一姫の両目が紅いと気付いた事、月下舞無や彩萌雪華と出会ったのは、少し後の事である。

目覚めてから五年間、二人は必死だった。
生きる事に。

両親と言う名の庇護者は二人には居なかったので、生きる為の金は自分達で稼ぐしか無かったのだ。

結果、一希は高校生の身でも大金が稼げるPGCの社員になり、一姫は家事でそれをサポートする。どちらかが、成り立たなくなれば、どちらも成り立たなくなってしまう関係。

信頼し、協力はしているが、互いに過度な依存はしていない兄妹の関係が、磐石な物に見えるか、不安定な天秤の様に見えるかで、この兄妹の見え方は随分と違うだろう。

一姫の目に支障が無い事を確認した一希は、二階の自室へ向かった。最低限の家具しか置かれて居ない部屋には、僅かな火薬の匂いが漂って居た。

一希はデスク脇の椅子に座ると書類を――事務所で、舞無から貰って来た依頼書を読み始めた。

今まで、一希が高校生と言う身で、数々の依頼を達成してきた原因の一つは、この情報整理に有る。

何をすれば良いのか、その為には、どんな武装で、どう動けば良いのか。不測の事態には、どう対応すれば良いのか。綿密なスケジュールを頭の中で組んでいく。

特に今回は、周囲にバレたら其処で終わりなので、何時にも無く一希は真剣だった。

幾ら渋ったとしても、やると決めたなら、真剣にやる。

それが依頼に対する一希のやり方だった。

書類を読み終え、情報を整理した一希は、部屋を出ると、向かいの一姫の部屋のドアをノックした。

「はい。」

「俺だ。入っても良いか？」

以前、ノックだけして入った時、酷い目に遭った事が有ったのでそれ以来一希は絶対に声を掛ける事になっている。

暫くごそごそと音がした後、答えが返って来た。

「どうぞ。」

開けた先には、一希の部屋と同じ様な飾り気が無い、最低限の家具しか置かれて居ない部屋が有った。

違う所が有るとすれば、一姫の部屋に置いて有るベッドが、一希の部屋には無いと言う事位だ。

一姫は、ベッドに腰掛け、小説を読んで居た。

「何の用ですか、兄さん。」

冷めた視線は相変わらず小説のページに落とされて居たが、一希は全く気にしない。

「いや、頼みが有るんだが。」

其処でやっと、一姫は顔を上げた。

「頼み？兄さんが私にですか？」

「ああ。……お前の名前を明日から貸してくれ。」

「は？」

全く予想して居なかった言葉に一姫は、豆鉄砲を喰らった様な顔を
した。

「いや、明日から、逆瀬女子高等学園に潜入するんだが」

「変態。後却下。」

「何でそうなる！？」

最後まで言わせて貰えず、即答で返答と侮蔑の言葉の両方を貰った
一希は、事情を知らない第三者から見れば確実に変態だった。

「覗きとかする為に潜入するんでしょう？ 確実に変態以外の何物で
も無いです。」

「お前は俺をどんな風に見てるんだ！？」

「犯罪者。」

そう言つて一姫は携帯を弄り始めた。番号を押している事から掛け
ようとしているのは…

「何通報しようとしてる！？」

「覗き魔の未遂の摘発ですけど。」

「違う！ 良いか、一姫。俺は明日から護衛任務で、転校生として、
逆瀬女子高に潜入するんだ。雪華と一緒に。だけど、そのままの
名前じゃ不味いだろ？ だから、俺はお前の名前を貸してくれって言
いに来た。これで良いか？」

「……『依頼で』と言つ言葉を付け加えて居ない兄さんが悪いんで
すよ。」

「……日本語って難しいね」

はぐらかそうとする一希を一姫は追撃する。

「逃げないで下さい、それは只の現実逃避です。」

「……で、答えは？」

溜め息を吐くと一姫は言つた。

「……余り、多様しないで下さいよ。」

「……悪いな。」

「仕方ないですよ、私達が生きる為ですから。…でも。」

「何だ？」

部屋を出ようと、一姫の言葉を背中であいていた一希は立ち止まり、振り返った。

一希の視線の先、其処には、さっきまでの冷めた視線から一転し、不安を視線に混ぜた一姫が居た。

「絶対に、無理だけはしないで下さい。」

それは、何度でも一希を変態呼ばわりする一姫の本心。

自分の為に、傷付かないで欲しいと言う、願い。

「…ああ、分かってる。」そんな一姫に対して、一希に出来たのは、言葉を返す事だけだった。

「じゃあ、兄さん。おやすみなさい。」

「ああ、良い夜を。」

そう言って、一希は部屋を後にした。

二人の『かずき』（後書き）

タイトル修正

『白紙の地図と高校生のPGC\half red eyes』
に、投稿日から、一週間後12月8日に変更します。
ご迷惑をお掛けします事を、お詫び申し上げます。

コメントをお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7675y/>

白紙の地図と高校生のPGC

2011年12月1日20時52分発行